

- ・二人に一人の割合で子宮がある男性がいる。
- ・当たり前で同性同士でも結婚ができる
- ・子宮を持つ男性は生理も来るし妊娠も可能
- ・また、肛門も濡れるし自然分娩が可能

※カントボーイではありません。

——都内某所。

そこは選ばれた人しか探し当てることができないという、謎に包まれた不妊治療専門の産婦人科があった。

なんでもそこに行けば不妊で悩む男性が必ず妊娠できるという。

妊娠率は驚きの百パーセント。

そして出産まで親身にサポートを行い診てくれるが、患者がその病院を必要なくなった時。すなわち、無事に出産を経て幸せを手に入れた時は、患者の前から忽然とその病院は姿を消すらしい。

あったはずの場所に病院はなく、またインターネットに載っていたはずのホームページも消えている。通話も繋がらない。

そもそも、その患者にしか見えていなかったんじゃないかと言われている。

勿論、そんな病院を信じている人は無いに等しく、都市伝説のようなものとして一部の人が知っているただの噂話だった。



「えっと……この辺りかな」

スマホのナビを使い、きょろきょろと辺りを見渡す小柄な青年がいた。

彼の名前は神崎楓。童顔のため学生に思われがちだが、これでも二十六歳。人妻だ。

楓は幼い頃に両親が事故で亡くなり、引き取ってくれる祖父母や親戚もいなかったなので、身寄りがなく施設育ちだった。

施設育ちということで周囲からは距離を置かれていたし、学校に親しい友人は特にいなかった。

そんな楓は高校を卒業してからは就職して一人暮らしを始め、ひっそりと質素な生活を送ってきた。

やはり職場でも孤立していた楓は、毎日仕事と家の往復だけをする日々。

孤独には慣れているが、それでも寂しいと感じる日もあり、両親がいればどんなに良かっただろうと、ひっそりと枕を濡らす夜もあった。

楓は天涯孤独であるが故、誰よりも「家族」を渴望し、憧れていたのだ。

そんな時に出会ったのが、楓の勤めている会社の取引先の相手であり、資産家の息子である神崎健一だった。

健一は楓より五つ年上で、ただの下っ端従業員である楓にも優しく接してくれた。

それどころか積極的に話しかけてくれ、楓が施設育ちと知っても決して疎むことはなく、何かと食事に誘ってくれたり、贈り物をくれたりと随分良くしてくれたのだ。

最初は同情からくるものだと引け目を感じていた楓だが、健一の優しさに絆され、二人の仲は急接近。

そして三回目の食事の時、健一に付き合ってくれと告白をされた。

最初はなんで自分なんかを……と困惑していた楓だったが、健一は「自分なんかと卑下しないで欲しい」と、「身寄りがいなく不幸な生い立ちでも真面目に生きている楓に心を奪われたんだ」と愛を語ってくれた。

両親がいなく施設育ちというだけで世間から疎まれてきた楓にとって、健一はまるで王子様に見えた。こんなの好きにならない方が難しいとさえ思った。

いつしか健一は楓にとって初めての頼れる人であり、大切な人となっていたのだ。

それから交際は順調に続き、一ヶ月後にはプロポーズをされた。

いささか進展が早い気がしたが、「家族になろう」と指輪を渡されてしまえば、楓は決して断れない。

楓にとって「家族」は何よりも欲しくて仕方がないものだったから。

楓は、健一のプロポーズを承諾し、これから幸せな結婚生活が始まると思った。

——しかし、そんな夢のような生活は最初から存在しなかったと知るのに時間はかからなかった。

優しくて誠実だと信じていた健一は、実際はただのクズで最低男だった。

その本性は結婚した途端に現れた。

実際の健一は優しさなど欠片もなく、外で愛人を何人も作るような最低な男だった。

楓と結婚をしたのも、ただ立場上正妻が欲しかっただけなのと、両親に早く跡継ぎを作れとうるさく言われていたからだ。

その時たまたま出会った楓は身寄りがなく頼れる身内もない。帰る場所もなければ他に守ってくれる人もいない。

つまり健一がいくら愛人を作り家庭で酷い仕打ちをされても、楓には離婚して帰る家もなければ金もない。言いなりにできる。

自分にとって都合の良い妻になるだろうと、そう目論んで求婚したのだ。

そんなことを知ってしまった楓は、ショックで食事も喉を通らない日が続いた。

今までずっと騙されていたのだ。馬鹿にされていたのだ。

屈辱のあまり怒りに満ち溢れたが、健一が目論見も正しく、今更この家を追い出されたら楓に帰る場所はない。

結婚を機に、健一の希望で仕事は辞めてしまった。

それも今考えれば健一の策略だったのだ。

「仕事を辞めていつも自分の帰りを待って欲しい」と、「今まで苦勞をして働いてきたのだからゆっくり過ごしてね」と随分甘い言葉を述べて仕事を辞めさせたのだが、実際は職を失ってしまえば楓が家を出て行くことは難しく、離婚もできなければ、養って貰っている以上健一の言いなりになるしかできないためだった。

全て、健一の計画通り。

なんて酷い。許せない。

楓はもう健一に愛はなく、あるのは怒りと憎しみだけだった。

——でも、一つだけメリットもあった。

外に愛人がいるお陰で、健一が家に帰ってくることは少なく、楓が健一と顔を合わせるのは週に数回程度。

健一と一緒にいれば金に困ることはなく、そこそこいい暮らしはできる。

だったら自分もこの状況を利用させてもらおうと楓は思った。

というか、楓に残された道はそれだけだった。

しかし、一つだけ問題が発生した。

それは、子宝に恵まれないことだった。

愛はなくても跡継ぎは作らないといけないことは流石に楓にも分かっていて、仕方なくセックスには応えていた。

楓自身も健一に愛はなくとも、せめて子供は欲しかった。

どうしても「家族」が欲しかったのだ。血の繋がった家族が。

もしも子供ができれば、健一との腐った結婚生活も耐えられる。

他所で愛人と楽しんでようが、誰と寝てようが、良い妻を演じられる。

そして、今まで自分が愛情をもらえなかった分も、愛情を捧げられなかった分も、たくさんたくさん子供に愛情を注いであげよう。

そう、思ったのだ。

しかし、結婚して一年が経とうとしているがなかなか授かることができず、義母にチクチク嫌味を言われる日々が続いた。

最近では施設育ちのあんたを嫁に貰ってやったのに恩知らずだの、子供も産めない能無し嫁だと罵られる始末だ。

義母から当然健一は庇ってくれるはずがない。

そんな日々が続けば流石に楓も参ってしまい、憂鬱な気持ちに襲った。毎日しんどくて、生きてるのが苦しい。

このままでは自分は完全にダメになる。

そう思った楓は、一度病院でちゃんと検査してもらおうと、スマホで不妊治療専門の病院を検索した。

するとすぐ一件目に引っかかった病院は、柏木マザークリニックという。

何でもそこの先生に"とある治療"をして貰うと、百パーセントの確率で妊娠すると書いてあり、口コミの評価は全て星5だった。

そんな夢みたいなのことがあるかと楓は半信半疑になったが、行ってみる価値はあると思って予約を取った。



「では神崎さん中にどうぞー」

患者は楓以外誰もいない待合室で待っていると、受付から名前を呼ばれる。

この病院は人気の割にはこじんまりしていて、どうやらスタッフは受付の看護師らしき年配の女性が一人だけのようだ。あとは診察をしてくれる先生しかいないらしい。

楓は初めての産婦人科にドキドキしながら立ち上がり、診察室のドアを開ける。

「こんにちは。どうぞお掛けになってください」

楓は呆気にとられてしまった。

なんとなく年配の男性医師を想像していたが、そこにいたのは想像していたよりもずっと若く、そしてかなりのイケメン医師だった。

そういえばネットにも先生がカッコいいとロコミで書かれていたかもしれない。

「どうしましたか？」

「あ、いや……すいません」

あまりのカッコ良さに見惚れてしまっていたが、我に振り返って椅子に腰掛ける。

「私は医師の柏木と申します。神崎楓さんですね」

「は、はい。よろしくお願いします」

「よろしくお願いします。あまり緊張なさらず、リラックスしてくださいね」

「はい……」

人当たりの良い爽やかな笑みを向けられて、楓はきゅんと胸がときめく。

別に面食いでは無いはずだが、突然のイケメンは心臓に悪い。

診察室は白で統一された清潔感溢れる部屋で、ゆったりとした癒しの音楽が流れている。

楓は音楽に詳しくは無いが、すごく心地の良いメロディだ。安心する。

「では早速診察に入らせて頂きたいのですが、お答えにくいデリケートな質問をしてしまうことも多々あります。ご了承ください」

「はい……」

「当院は患者様が赤ちゃんを授かり、無事に産まれてくるまでしっかりとサポートさせていただきますからご安心を」

「はい」

「では、当院を来院なさった経緯を教えてください」

「はい……えっと、実は――」

楓は事の経緯を一から説明した。



「お答えいただきありがとうございます。まず神崎さん……」

「はい」

「あなたはとてもよく頑張っているのですね」

「え……？」

柏木はにこりと微笑み、楓にあたたかい言葉を投げかけた。

「ここにくるまでたくさんの心労や苦労があったでしょう。今までよく頑張りましたね。そしてよく当院まで辿り着いてくれました」

「そんな……ありがとうございます……」

……なんだろう。この気持ちは。

結婚してから初めてだった。こんな風に人に褒められるのは。

医師からすればこれも仕事のうちかもしれないが、こんな優しい言葉をかけられることなど予想もしていなかった。ましてや頑張りましたなんて労いはこれっぽっちも想像もしてなかった。

普段、楓は人に褒められるどころか義母にはいびられて、旦那は愛人を作って帰って来ない日々だ。

自分の人生は何なのだと悲観する日も多かった。

それが、まさかこんなところで自分を褒めてくれる人が現れるなんて思わず、楓は泣きそうになってしまった。

自分で思っていたよりもストレスが溜まっていたのかもしれないと実感する。

「絶対に赤ちゃんを授かりましょうね」

「はい……」

にこりと穏やかでいて力強い笑みに楓は胸が高鳴る。

この人に任せれば本当に大丈夫かもしれないと、不思議とそう思わせてくれた。

「不妊には身体的問題の他にもストレスや環境の影響もありますが、ひとまず内診して神崎さんの身体に異常がないかを調べましょう。内診室へどうぞ」

「あ、はい……」

内診で……あれだよな。

覚悟はしていたがやっぱり内診するよなあ……と、楓は身構える。

あの、ネットでしか見たことがない脚が開く椅子に座って、あそこをまじまじと見られるのだろう。

今まで夫人系の病気を患ったことのない楓には経験がないことだった。

「最初は怖いかもしれませんが、慣れてしまえば大丈夫です。リラックスしてください」

すると、楓の心情が伝わったのか、柏木はまた優しい言葉をかけてくれる。

そんな気遣いに楓はまた胸が高鳴って、どこか安心することができた。

「はい。よろしくお願いします」

なんて素敵なお先生だろう。

これなら安心して自分の身体を任せられる。

楓はそう確信して内診室へと足を踏み入れた。



「では下着も脱いで、そちらの椅子に座ってお待ちください」

「はい」

そこには案の定、内診台と言われる椅子がある。

脚を左右に開くように乗せる部分があり、上昇すると医師に秘部をばかんと晒す構図の椅子だ。

医師との間には仕切りのカーテンがあるので顔は見えないが、やはり緊張する。

しかし、診察のためなら仕方がない。

楓はズボンとパンツを脱ぐとカゴの中に入れて、意を決して内診台に腰掛ける。

下半身は何も身に纏っていないので、股間の部分がスー
スーした。

楓の平均的なサイズのペニスはふにやりと小さくなり震えていた。

「準備できましたか？」

「は、はい」

「では、椅子が動きますね。危ないので動かないでください」

ゆっくりと椅子が上昇する。

仕切りの先でばかんと大きく開いた脚の間が徐々に上を向いていき、明るい部屋で隠すことなく晒されていく。

「……っ」

気づくと脚は高く上げられて、ペニスは天井に見下ろされているようだ。女性と違い、男性は肛門を見るので、女性よりも椅子が高く上がるようになっているらしい。

なんとも恥ずかしく屈辱的な格好だ。

(こんな明るい場所で恥ずかしい場所を見られている……)

普段は隠れた窄み。そこは誰しものが秘められている部分だ。

性交の時ですら曝け出すのに勇気が必要なのに、こんな若くてイケメンな医師に見せつけているなんて……

楓はカッと恥ずかしくなり、思わず顔を腕で覆った。

病院に来る前にシャワーは浴びたけれど、汚くないだろうか、臭いはないだろうか。

医師は患者の秘部など見慣れているので気にしてないとは分かっているが、楓は不安になった。

そんな楓の心情などお構いなしに、柏木はゴム手袋を嵌め、楓に向き合う。

「ちょっと触りますね」

「はい……」

か細い声で返事をするしかできない。

そっと尻穴の縁に指が添えられると、ビクッと敏感に体が反応してしまい、まるで意識しているようでますます羞恥が襲う。

しかし、柏木はそんな楓のことなど気にもせず診察を続ける。

「左右に開きます。楽にしてください。ゆっくり呼吸して……」

くにいと、普段は固く閉じた窄まりが左右に開かされる。

「……ッ」

皺が集まる中心とは別の方向に引っ張られる感覚に、楓は息を吞んだ。

くに……くに……くば……くば、くに、くば……くばっ、くに、くばあ……

(そんなに引っ張ったら、中が見えちゃ.....やだあ.....)

楓は泣きそうになりながらも、耐え続けた。

穴の収縮具合を観察しているのだろうか。こんな明るい場所です尻の穴を好き勝手にくぱくぱされる屈辱。

意識しないようにと心がけても、どうしても尻穴をくぱくぱされている情景を想像してしまうと、穴がひくんっ、ひくんっといくついてしまう。

(先生に尻穴ひくつかせてるところを見られてる.....)

いくら診察だと言ってもあまりに恥ずかしすぎて、楓は泣きたい気持ちでいっぱいだった。

恥ずかしくて恥ずかしくてたまらない。

それなのに楓のふにやっと萎えていたペニスはむくむくと勃起あがっている。

(やだ！ 勃ってる.....！ なんで！ 勃つなよ.....！！)

楓の意思に反して勃起するペニス。

ただアナルを弄られてるだけなのに。

すると、そんな楓の焦りを感じ取ったのか柏木からは安心させる声色が聞こえた。

「大丈夫ですよ。生理現象で反応してしまう患者さんが殆どです。みなさんそうですから」

「そ、そうですか……」

「寧ろ健康で良いことです。安心してください」

「は、はい……」

柏木は本当に気にしていないのだろう。なんとでもないように楓のアナルを観察しながら「んー……締め具合は問題ないな……感度も良好そうだし……」とぶつぶつと診断をしているので余計に恥ずかしさが増してしまう。

「もう少しよく診たいので我慢してくださいね」

「はい……」

「体の力を抜いてください」

カチッと何かスイッチを押す音がしたと思ったら柏木の手にはペンライトが握られていた。

それからアナルに焼け尽くすような視線を感じる。

ペンライトで穴を照らされているのだ。

きっと柏木の目には楓の尻穴の皺一本一本すら鮮明に映し出されている。

(は、恥ずかしい……！)

窄んだ皺を優しくなぞられて、背筋にぞくぞくした甘い痺れが襲う。

丁寧に、まるで皺の本数を数えるように触れられて、楓は思わず声を噛み殺した。

(う〜〜、そんな優しい手つきで触ったら……)

尻穴をほぐすように揉まれ、撫でられる。

途中、窄まりの中心をつん、とつつかれたら思わず「あっ……」と小さく声が出てしまった。

(やばい……声、出ちゃう……我慢できない……)

楓は必死に声を押し殺す。

まるでアナルマッサージでもするような優しい手つきに気がおかしくなりそうだった。

「ふっ、……あっ、んっ……」

「もう少し診させてくださいね」

「は、い……あっ……」

楓の意思とは反して、アナルはほころんでいく。

柔らかくなった穴がぐずぐずになり、甘えるように指に吸い付いていた。

(穴触られてるだけなのに、気持ちいい……)

そうして、暫くして診察を終えたのか柏木の手がそうっと離れた。

「ちょっとお尻、拭きますね」

「……はい」

どうやら愛液で濡れてしまっているらしい。

実を言うと楓は健一とのセックスではほぼ濡れず、濡れやすい体質ではなかったと思っていた。

しかし、初めての状況に感覚が敏感になっているのは確かだ。

もしかしたら結構な量で濡れてしまったのかもしれない。

柏木は楓の尻をガーゼのようなもので拭った。
ざらっとした布が尻穴を擦る。

——ぐちゅっ

(んんん〜〜〜〜ツツツ)

なんとか声は抑えたものの、散々優しく揉まれた肛門の刺激は酷だった。

しかも拭かれている感触で相当濡れていたのがわかる。
ガーゼが尻穴を何往復もする。

それでも楓の穴からは、とろとろと愛液が止まらない。
最後に優しく穴をグリグリされてから拭われた。

「綺麗になりました」

「す、みません……」

「では中を診てみます。見やすくするように中を広げる冷たい器具が入るので力を抜いてください」

「は、い……」

事前にネットでググっていたのでなんとなくの知識はある。

所謂『クスコ』という、口ばしのような器具で胎内を拡げるものだ。

楓はぎゅっと手を握りしめて、目を瞑る。

「傷つけないために滑りやすくするのでジェルを塗ります。
ちょっと冷たいかもしれません」

ちゅぷっ...と、穴にひんやりした液体を塗り込まれる。

「ひ、んっ.....！」

「すみません、やはり冷たいですよね」

冷たいジェルの感触に驚いて思わず震え上がり、アナルにぎゅうっと力が入る。

「や、こっちこそ.....すみませ、ん.....」

「力抜いて.....大丈夫です.....リラックスして.....深呼吸.....」

思い切り息を吸って、ハーとゆっくり息を吐く。その瞬間、くっ.....と指先が穴の中に潜り込んできて、直腸内にも塗りたいようにジェルが入ってくる。

「ふっ……」

まるで穴を解すような指の動きに、楓は必死に声を押し殺した。

敏感になり、柔らかく解れていく楓の尻穴はやらしく光り、はくはくと蠢いていた。

「では、器具を入れていきます」

穴の中心に、冷んやりした硬い金属の端があてがわれる。
その無機質な異物に楓はほんの少しの恐怖を感じる。

——ちゅふっ

「力を抜いてくださいね」

——グッ、ググっ……

「ひっ……」

——ぐふっ

「……っ——！」

冷たい器具が胎内にどんどん入ってくる。

性行為で挿入される肉感のあるペニスとは違い、無機質な器具が内臓を押し潰すように奥へと侵入してくる。

楓は息を呑む。異物感がすごい。

「……器具が奥までしっかり入りましたよ」

「は、い……」

「中を診ていきますね。痛みがあれば教えてください。開いていきます」

丁寧さが売りでもあるのだろう。いちいち説明されると余計に羞恥心を煽るのだが、こちらを怖がらせないために言っているなので楓は何も言えず、耐えるしかない。

カチャ、カチャッ……ミチッ、ミチィ……

器具が開く音と閉じた穴を内部からこじ開けられている感覚に、恐怖心が湧き出る。

こんなことでビビってたら赤ん坊を産む時なんかもっととんでもないことになるのに、圧迫感が凄まじく泣きたくなる。

普段、誰にもみせることのない内部がゆっくりと曝け出されていく。

力の抜き方が分からずにいた。

「痛みはありますか？」

「痛くは、ないけど……圧迫感が……」

「では大きく深呼吸してください。リラックスして」

言われた通りに深呼吸をする。

楓が呼吸すると、クスコで開かされている直腸も合わせるように蠢いた。

体の力を抜いても閉じることのない尻穴に違和感しかない。

(今、俺のアナルはぽっかり開いてるのか……)

「では、診ていきますね」

再び直腸の奥をペンライトで照らされ、観察される。